

1. 授業の概要(ねらい)

1970年代、80年代、90年代と、日本の電機各社は、世界最強を誇っていました。
松下(パナソニック)、ソニー、日立、三菱、東芝、シャープ、三洋、それに、NEC、富士通と、
世界トップクラスの企業がそろい、盤石の態勢と見られていました。

ところが、三洋電機は10年ほど前、経営不振に陥り、パナソニックに買収されました。

驚いたことに、パナソニックは、三洋の一部を中国企業に売却してしまいました。

シャープは、台湾の企業の傘下に入りました。

東芝は、原子力発電の名門・ウエスティングハウス社の買収で記録的な赤字を出し、それを隠すために
粉飾決算をしてしまいました。その結果、一時は経営危機に陥り、家電部門や医療器部門を売却する事態に
なっていました。

ソニーは1990年ごろまでは、画期的な新製品を出し続け、アップルのスティーブ・ジョブズが憧れた企業でしたが、
いま、時代の先端を行くソニーの新製品というのを見なくなりました。

日本の電機産業、電機企業に、いったい何が起きたのか。

いま、日本の電機産業、電機企業は、どうなっているのか。

最強を誇った日本の電機産業に、どうして、「GAFA」が登場しなかったのか。

日本の電機産業、電機企業の問題点、現状、課題を探り、将来を展望します。

いま「電機」といいましたが、「電機」は、

重電、弱電、家電、あるいは、半導体、通信機など、広い分野にわたります。

「重電」と「弱電」「家電」の違いを言える人はいますか？

講義では、そのような基礎知識も学びます。

2. 授業の到達目標

日本経済、世界経済は、かつてなく激しく動いています。

5年前、10年前とはまるで違う動きを見せます。

とくにインターネットの普及は、社会そのものを大きく変えてしまいました。

電機産業は、インターネットの普及によって、産業のありかたそのものが変わってしまいました。

電機の過去、現在、将来を勉強し、

それを通じて、日本経済、世界経済を見る一というの、ひとつの到達点です。

3. 成績評価の方法および基準

講義では、たくさん質問しますので、積極的に答えてください。

万一、オンライン講義になった場合は、毎回、課題を出しますので、その解答を出してください。

講義の最終回には講義内試験をします。

質問あるいは課題への解答を、最終回の試験で、評価を決めます。

4. 教科書・参考文献

教科書

教科書、参考書は定めませんが、新聞、テレビ、あるいはネットで、日々のニュースを、しっかりウオッチしてください。

5. 準備学修の内容

産業の動向は、経済だけではなく、政治、国際、社会の動きからも、大きな影響を受けます。

君たちは、その中で、生きています。

いま、日本と世界で、何が起きているのか、答えられるように、日々のニュースに関心を持ってください。

6. その他履修上の注意事項

第一に、この講義は、その時々々のニュースをベースに進めていきたいと思います。

ひとまず、シラバスを掲載しておきますが、なにか大きなニュースが発生したら、そのニュース
を取り上げます。

そのため、この講義は、必ずしも、シラバス通りに進むとは思わないでください。

シラバスは、あくまでも、目安として考えてください。

第二に、この講義のためのノートを一冊、用意してください。

小さなノートではなく、A4サイズのノート、いわゆる大学ノートを用意してください。

講義の内容を、しっかりと、ノートに取ってください。

講義では必ず、鉛筆(シャープペンシルでもかまいません)と消しゴムを持って来ててください。

7. 授業内容

【第1回】 初回は、全体のガイダンスです。

日本の電機産業、電機企業について学ぶ意味を話します。

【第2回】 工業製品で重要なのは、規格の統一ということです。

ネジやボルトといった部品は、直径や長さが統一されていれば、どの製品でも使えます。

逆に、ネジの直径や長さがメーカーによってばらばらだと、大変効率の悪いことになります。

とくに電機は、規格の統一が非常に重要なポイントになります。

例えば、パソコン系のUSBがそうです。

USBは形状とサイズが決まっているので、どのメーカーのパソコンでも、周辺機器を接続できます。

履修上の注意で、A4ノートに触れましたが、このA4も、世界の統一規格です。

まず、規格統一の大切さを学びます。

【第3回】 家電、弱電、重電の違いを学びます。

半導体、半導体製造、通信、精密機械についても概観します。

- 【第4回】 日本の電機産業は、1980年代に全盛期を迎えました。
当時の日本の電機企業は、世界の市場をほぼ制覇していました。
実際には、どんな状況だったかを学びます。
- 【第5回】 全盛を誇った日本の電機産業は、どうして弱くなったのか。
2000年を過ぎてから、ソニーの変調が目立つようになりました。
日本の電機を牽引してきたソニーが、新製品を出すことが出来なくなり、
2003年4月に発表した決算が、大幅な減益となりました。
これをソニーショックと呼びます。
ソニーは、ソニーショックによって低迷期を迎えてしまいましたが、
最近になって、ようやく復活してきました。
ソニーの栄光と挫折、復活を学びます。
- 【第6回】 三洋電機の衰退、消滅。三洋電機は、堅実な電機会社として、高い評価を得ていました。
しかし、ソニーの凋落の後を追うように経営内容が悪化し、パナソニックに身売りしました。
パナソニックは、その後、三洋の家電部門を中国企業に売ってしまいました。それがアクアです。
三洋の凋落について勉強します。
- 【第7回】 シャープの転落。シャープは、世界でもいち早く、液晶テレビに特化し、2010年ぐらいまでは、強力な地位を築いていました。
しかし、ソニー、三洋について、経営が悪化し、やがて台湾の企業の傘下に入ってしまう。
液晶のシャープに、何が起きたのか。
- 【第8回】 東芝の危機。三洋、シャープがおかしくなっても、東芝は大丈夫だろうとだれもが思っていました。
東芝は、家電から半導体、原子力まですべてを手がける巨大企業で、経営は盤石と思われていました。
ところが、アメリカの原子力企業ウエスティングハウスを買収したところ、ウエスティングハウスの負債が東芝にのしかかり、
東芝そのものが経営破たん、の危機に陥ります。
東芝は、家電部門や、半導体、医療部門を売却し、なんとか危機を乗り越えました。
しかし、半導体も医療部門も、東芝の稼ぎ頭だったのです。再生に向け、まだ先行きは不透明なままです。
- 【第9回】 NECと富士通。通信と半導体を主力とする会社が、日本には、あります。
その代表選手が、NECと富士通です。
1980年代、90年代には、NECも富士通も、半導体とパソコンでトップ企業となり、世界をリードしました。
ところが、両者とも、半導体は、海外の会社との競争に負け、パソコン部門も最近、中国の会社が資本参加しました。
日本を代表する優良会社に何があったのかを調べます。
- 【第10回】 日本の電機には、大手各社だけではなく、独自の技術を持つ中堅企業がたくさんあります。
日本経済は、そうした中堅企業がたくさんあるのが特色であり、強みでもあります。
それは、パイオニア、沖電気、ケンウッドといったメーカー、あるいは、オンキヨー、山水、トリオ、ヤマハ、DENONなどのメーカーです。
そういう中堅企業を調べます。
- 【第11回】 苦難の時期を経て、日本で、しっかり世界と戦っているメーカーは、パナソニック、日立、三菱電機というところになりました。
ソニーも、一時の低迷を乗り越え、復活しています。
NEC、富士通も技術力で再生を図ります。
日本の電機が再生するには、どうすればいいのかを考えます。
- 【第12回】 アメリカの電機産業と日本の電機産業。
日本の電機産業は、戦後、アメリカの電機産業をお手本にし、アメリカから学んで、大きくなりました。
そして、1970年代には、日本の電機産業はアメリカを逆転します。
しかし、2000年以降、日本の電機は力を失っていきます。
日米の電機を比較して考えます。
- 【第13回】 中国と韓国。東芝は中国の電機に家電部門を売却しました。
シャープは台湾の企業の傘下に入りました。三洋は中国の企業に売却されました。
一方、NECや富士通が半導体でおかしくなったのは、韓国企業とくにサムスンとの半導体の競争に負けたからです。
中国と韓国の電機産業は、今度、どう展開するのかを考えます。
- 【第14回】 アメリカの電機産業は、一時、衰退したように見えたことが、1980年代から、新しい企業が続々と登場してきました。
GAFAと呼ばれるグーグル、アマゾン、フェイスブック、アップルがその代表です。
それだけではなく、ウインドウズのマイクロソフト、半導体のインテルなど、
GAFA以外にも巨大企業が世界市場を握っています。
日本は、シャープ、三洋電機など電機企業が相次いで衰退したあと、
それに変わる企業、GAFAのような企業が出てきません。
日本の電機が再生するには、そうした新しい企業が必要です。
では、どうすればいいのか。今後を展望します。
- 【第15回】 最終回は、講義内でまとめと試験をします。